様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月１５日現在

機関番号：37111
研究種目：基盤研究(A)
研究期間：2008～2011
課題番号：20242024
研究課題名（和文）日韓集落の研究―弥生・古墳時代および無文土器～三国時代―
研究課題名（英文）The studies on the settlements in Japan and Korea-The Yayoi Period to the Kofun Period in Japan, and The Mumon Pottery Period to the Three Kingdoms Period in Korea-

研究代表者
武末　純一（TAKESUE JUNICHI）
福岡大学・人文学部・教授
研究者番号：80248533

研究成果の概要（和文）：
この研究では、日本と韓国の弥生・古墳時代集落研究を、集落構造論の立場から検討し、最終報告書(650 頁)を発刊した。日韓の環溝集落の様相や海村の様相、日韓それぞれの地域の国際交流港での渡来人集落が明らかになった。日韓の首長層居宅の比較や、日本人による韓国の集落分析、韓国人による日本の集落分析もなされた。そのほか、日韓の金属器生産遺跡や馬飼集団の集落も解明できた。全体として日韓の集落研究者の絆を深め、両地域の弥生・古墳時代集落研究を活性化できた。

研究成果の概要（英文）：
In this research, the settlements of Japan and South Korea in Yayoi-Kofun period were considered from the viewpoint of the settlement structure, and the final report (650 pages) was published. The Aspect of the Japan and South Korean settlements enclosed by round ditches, of the villages near sea and the visitor settlements in the international exchange harbors of Japan and South Korea were disclosed. Chief`s house of Japan and the Chief`s houses of were also compared, and the analysis of the South Korean settlements by Japanese researcher and the analysis of Japanese settlements by South Korean researcher were conducted. In addition, the ruins of metal goods production and the horse keeper group's settlements both areas were made clear. The teamwork and combination of researchers working on the settlements were deepened as a whole and the settlement research of both areas in Yayoi to Kofun period have been activated.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	6,600,000	1,980,000	8,580,000
２００９年度	6,100,000	1,830,000	7,930,000
２０１０年度	6,300,000	1,890,000	8,190,000
２０１１年度	7,300,000	2,190,000	9,490,000
年度			
総　計	26,300,000	7,890,000	34,190,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：弥生・古墳時代、掘立柱建物、海村、無文土器～三国時代、環溝、生産遺跡、集落、首長層居宅

１．研究開始当初の背景

(1)弥生・古墳時代像は、これまで主に墳墓

資料で描かれたが、集落を検討してはじめて正しく描かれる。研究代表者の武末は日韓集落を検討する中で、日本の弥生・古墳時代の集落の理解には、同時代の朝鮮半島の集落への理解が必要で、しかも共同研究が不可欠なことを痛切に自覚した。

(2)そこで、2005年4月に日韓集落研究会を組織した。その概要は以下の通りである。

①毎年１回の研究会を両国の研究者の参席のもとに開催する。（韓国と日本と交互に開催）

②取り扱う時代は、日本の弥生時代～古墳時代、韓国の無文土器（青銅器）時代～三国時代とする。

③日韓の集落の系統・影響関係や、比較分析をおこなう。

④研究の多様化（多様な視点の形成）をはかるとともに、発表や議論を通じて日韓それぞれの研究者の視点による分析法や分析資料、分析結果の共有を目指す。

⑤とりあえずの具体的な課題は、日韓それぞれの集落研究史の共有、竪穴住居・掘立柱建物・広場・環濠（溝）・竪穴・入口部・道路などの諸施設研究の現状の把握、さまざまな生産遺跡や生産遺構、首長層居宅・土城、集落からみた地域構造の解明とする。

(3)そして、2005年9月10･11日に第１回共同研究会、2006年8月10・11日に第2回共同研究会、2007年8月30日･9月1日に第3回共同研究会「韓日集落研究の現況と課題Ⅲ」を開催した結果、本研究の申請と遂行が十分可能であると確信した。

なお、日韓集落研究会の当初の代表は、韓國側が李健茂氏で日本側は武末純一、事務局は、韓國側がソウル歴史博物館に置いて金武重が担当、日本側は福岡大学人文学部歴史学科考古学研究室に置いて桃崎祐輔が担当で出発した。途中、韓國側事務局は韓国考古環境研究所を経て中部考古学研究所に移り、代表は李健茂氏の文化財庁長官就任に伴って安在晧が引き継いだ。

２．研究の目的

(1)農村とは別の理論で動く山村･海村の実像を、遺構だけでなく遺物も含めて総体的に検討することで、浮き彫りにする。特に海村については、単なる漁村ではなく海上交易活動も含む概念として新たに設定する。

(2)日韓の渡来人関係集落の様相を具体的に明らかにする。弥生時代前半期の後期無文土器人集団と、古墳時代の朝鮮三国系渡来人集団を摘出し、それらの集落相の検討から歴史的役割を探る。また、朝鮮半島南部に居住する倭人系集団を摘出して、その歴史的役割を解明する。

(3)当該時期の日韓両地域の生産遺跡を解明する。石器・土器・玉類の生産遺跡にはじまり、金属器（鉄器・青銅器）・ガラス器の生産遺跡、瓦質土器・陶質土器・須恵器生産遺跡、さらに牧と馬飼集落などの実態を解明し、相互に比較検討する。

(4)韓国無文土器時代の環溝集落･拠点集落や高地性集落の各地域における全体像の解明と、日本弥生時代前・中期環溝拠点集落や高地性集落との比較検討と関連性を追及する。

(5)韓国の首長層居宅・土城・都城と日本の弥生・古墳時代首長層居宅の比較検討と関連性を追及する。

(6)日韓両地域の住居跡の動態分析を、総合的に比較検討する。

(7)日韓の集落研究関係基本文献をそれぞれの国語に訳出することで広く周知させ、集落研究への認識を底上げする。

全体として停滞している集落論の現状を打開し、新しい潮流の創出が目的である。

３．研究の方法

(1)本研究では、日韓集落研究会の組織を維持しながら、日本の弥生時代～古墳時代および韓国の無文土器時代～三国時代の集落様相を把握するとともに、系統や影響関係を検討し、比較分析する。

(2)研究の多様化（多様な視点の形成）をはかり，発表や議論を通じて新たな成果をえるとともに，日韓の研究者による分析方法や分析資料，分析結果を共有する。

(3)方法は、「集落遺跡出土の全ての遺構・遺物を検討して、その裏に潜む一時期の構造とその変動を明らかにする」集落構造論の立場に立って分析する。住居跡の様相分析は、韓国の分析成功例を参照しながら、日本の集落例に適用する。また、交易の結節点と言う視点で設定した海村の分析方法を韓国の集落例に適用して分析し、日韓の海村の様相とネットワークを明らかにする。また、集落の範囲を確定するための空白論や、集落・地域・世界という3つのレベルでの検討の重要性、集落の中での遺物のありかたを検討する重要性、を会員全員が共有する。

(4)以上のために、年 1 回研究会を開き、韓国側研究者を毎年 7～8 名招聘するとともに日本側研究者も韓国の資料を調査する。また年度末に中間報告を刊行し、日韓の基本文献をそれぞれ訳出する。日韓両国の研究者の長期的な信頼関係を築き、韓国研究者が日本の資料を、日本の研究者が韓国の資料を取扱って論文を書けるようにする。

４．研究成果

(1)研究代表者・研究分担者・研究協力者からなる日韓集落研究会会員全員が論文を執筆した最終報告書(650 頁)を刊行した。

(2)具体的な個別の研究成果には、

①朝鮮半島における無文土器時代早～中期集落の地域相を発掘資料に基づいて解明
②日韓の弥生・古墳時代の環濠集落や拠点集落の具体的な様相を解明した。
③朝鮮半島の無文土器時代資料の検討から、山村での家屋葬の存在や、高地性環濠集落に祭儀集落が含まれる可能性を提起した。
④弥生時代における日韓での海村の創出を、具体的な遺構・遺物の様相から明らかにするとともに、それらが楽浪郡から近畿地域まで及ぶ一つの交易世界を形成し、それぞれの地域(国)で中心となる巨大農村(国邑)に制御されながらも、一方では交易活動によってそれらの国邑を制御したことを明らかにした。
⑤弥生時代における日韓両地域での渡来人集落の様相、古墳時代における国際交流港や各地域での渡来人集落の様相を解明した。
⑥日韓の首長層居宅の様相を比較検討して、その共通点と相違点を探求した。
⑦日本人による韓国の集落分析および韓国人による日本の集落分析を実施できた。
⑧日韓の金属製作遺跡、なかでも鉄器生産遺跡を解明するとともに、古墳時代の牧を日韓交流の中に位置づけた。

などがあげられる。

①はこれから弥生時代のはじまりを考える上で、必ず参考にすべき成果で、②の成果をもとにとくに古墳時代集落研究が活性化する。③はこれまでの高地性集落論を大きく変える契機となる。④はこれからの日韓両地域海村研究や渡来人研究、首長層居宅研究の基礎となり、⑦は今後こうした交流研究を目指す研究者への励ましとなる。⑧も日韓での鉄器生産比較研究や、日韓古墳時代の馬匹生産研究へ大きく貢献することは疑いない。

また、当初の研究課題を終えて次の研究課題へ進んだ研究者もいた。

(3)方法論の面でも、会員間での集落構造論の共有が果たせた。各施設を浮き彫りにすること、遺構なかでの遺物のありかたを重視すること、地域の多軸性・多様性・重層性の認識、遺跡(集落)構造分析・地域構造分析・世界構造分析を三位一体でおこなうべきことなどである。

(4)なによりもこの研究を通じて日本側会員と韓国側会員のあいだに深い信頼関係を打ち立てることができた。日韓両国の集落研究を大きく前進させることができたし、研究開始前に比べて集落をめぐる研究会は大きく増えたし、何よりもそうした研究会に本会員がしばしば招聘されたことがその証明である。

4 年間に招聘した韓国人研究者は別表の通りで、研究代表者が 1 カ月、各地の分担研究者は 1 週間程度である。各研究分担者が招聘することで、単に分担研究者と韓国の研究者のつながりだけが深まるのではなく、その機会に各地域の研究者にも門戸を開いて交流したため、それぞれの地域の集落を韓国の様相も含めて考える機運を醸成できた。

(5)今後さらに集落研究をすすめるためには、いま一度、日常土器などを含めた日韓の弥生・古墳時代遺物を再検討する必要性が浮上してきた。

韓国人研究者短期研修実施一覧表

研究代表者・分担者	2008	2009	2010	2011
武末純一(福岡大学)	―	河眞鎬	李暎澈	金権中
亀田修一(岡山理科大学)	兪炳琭	鄭一	李東熙	李弘鍾
橋本博文(新潟大学)	朴栄九	金昌億	李盛周	千羨幸
松木武彦(岡山大学)	朴泰洪	河承哲	李亨源	李昌熙
坂靖(橿原考古学研究所)	河眞鎬	權五栄	池賢柄	孔敏奎
高久健二(専修大学)	金権中	金武重	朴升圭	尹昊弼
山本孝文(日本大学)	―	李宗哲	李基星	安在晧
重藤輝行(佐賀大学)	―	兪炳琭	金奎正	裵徳煥

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　98 件）

(1)松木武彦「「世界」史の中の弥生文化―環境・認知・文化伝達―」『考古学研究』第 58 巻　pp37-50　2011 年　査読有
(2)武末純一「集落からみた渡来人」『古文化談叢』第 63 集　九州古文化研究会　pp3-20　2010 年　査読有
(3)武末純一「韓国・金海亀山洞遺跡 A1 地区

の弥生系土器をめぐる諸問題」『古文化談叢』第 65 集(1)　九州古文化研究会 pp145-174　2010 年　査読有
(4)桃崎祐輔「九州の屯倉研究入門」『還暦、還暦？、還暦！－武末純一先生還暦記念献呈文集・研究集－』武末純一先生還暦記念事業会　pp217-255　2010 年　査読無
(5)高久健二「楽浪・原三国時代研究の新動向」『季刊考古学』第 113 号　雄山閣　pp 56-60　2010 年　査読無
(6)重藤輝行「九州に形成された馬韓・百済人の集落－福岡・西新町遺跡を中心として－」中央文化財研究院（韓国）10 周年記念国際学術大会『馬韓・百済の人々の日本列島への移住と交流（馬韓・百濟人の日本列島移住と交流）』資料集　国立公州博物館・中央文化財研究院・百済学会 pp111-145　2010 年　査読無
(7)七田忠昭「吉野ヶ里遺跡の現況と松菊里遺跡の未来」『扶餘松菊里遺跡からみた韓国青銅器時代社会』第 38 回韓国上古史学会学術発表大会資料集　韓国上古史学会 pp123-141　2010 年　査読無
(8)禰冝田佳男「明石川流域の弥生時代集落」『坪井清足先生措卒寿記念論文集―埋文行政と研究のはざまで―』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会　pp626-634　2010 年　査読無
(9)田中清美「弥生時代および古墳時代前期の井戸の祭祀と意義」『坪井清足先生卒寿記念論文集―埋文行政と研究のはざまで―』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会 pp730-741　2010 年　査読無
(10)庄田慎矢「段階編年と重複編年―朝鮮半島南部青銅器時代前期における編年の秩序―」『季刊考古学』第 113 号　雄山閣 pp35-38　2010 年　査読無
(11)権五栄「日本奈良盆地南部の最新発掘調査成果」『百済学報』3　百済学会 pp91-105　2010 年　査読有
(12)金権中「第 5 章青銅器時代の江原、第 4 節遺跡と遺物、1.北漢江流域」『江原道史』第 2 冊(先史時代)　江原道史編纂委員会 pp400-421　2010 年　査読無
(13)金奎正「湖西・湖南地域松菊里型住居地研究」『人文学研究』第 11 集 1 号　円光大学校人文学研究所　pp129-162　2010 年　査読無
(14)朴栄九「嶺東地域粘土帯土器文化の展開様相」『韓国青銅器学報』第 7 号　韓国青銅器学会　pp64-91　2010 年　査読有
(15)宋満栄「六角形住居址と漢城期百済聚落」『韓国考古学報』74　韓国考古学会 pp76-117　2010 年　査読有
(16)宋満栄「中部地方原三国時代住居址と聚落―研究成果を中心として―」『馬韓・百済の人々の住居と人生-特別展図録』国立公州博物館・中央文化財研究院 pp202-221　2010 年　査読無
(17)尹昊弼「沖積地に立地した集落遺跡の発掘調査法」『韓国埋蔵文化財調査研究方法論』6　国立文化財研究所　pp205-257 2010 年　査読無
(18)李基星「日本考古学の形成と時代区分」『早稲田大学から来た日本の古代文化』ソウル大学校博物館　pp108-115　2010 年　査読無
(19)李東熙「“湖西と西部湖南地域初期鉄器-原三国時代編年”に対する反論」『湖南考古学報』第 35 集　湖南考古学会　pp47-79 2010 年　査読有
(20)李宗哲「全南南海岸の松菊里型住居文化」『韓国青銅器学報』第 6 号　韓国青銅器学会　pp4-32　2010 年　査読有
(21)李亨源「集落構造からみた韓国中西部地域の青銅器社会」『国立歴史民俗博物館研究報告』160　国立歴史民俗博物館 pp87-100　2010 年　査読有
(22)河承哲「山清中村里古墳群に対する小考」『慶南研究』2　慶南発展研究院歴史文化センター　pp5-43　2010 年　査読有
(23)武末純一「三韓と倭の交流―海村の視点から―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 140 集　国立歴史民俗博物館 pp267-286　2009 年　査読有
(24)山本孝文「百済羅城出土木製施設の土木技術史的検討」『木・ひと・文化－出土木器研究会論集－』出土木器研究会 pp. 205-214　2009 年　査読無
(25)寺井誠「外交の窓口難波の考古学的研究」『古代嶺南と大阪の出会い－道路・土器・鉄器－』嶺南文化財研究院・大阪市文化財協会交流 10 周年記念 Symposium 資料 pp233-262　2009 年　査読無
(26)金昌億「古代木造井戸についての研究」『聚落研究』1　書斉文化社　pp45-75 2009 年　査読有
(27)裵德煥『嶺南南部地域青銅器時代住居址研究』東亜大学校大学院博士学位論文 1-203 頁　2009 年　査読有
(28)安在晧「松菊里文化成立期の嶺南社会と弥生文化」『弥生文化誕生』弥生時代の考古学 2　同成社　pp73-89　2009 年　査読無
(29)李盛周「族長墓と‘国’の成立」『21 世紀の韓国考古学』周留城出版社　pp75-116 2009 年　査読無
(30)李暎徹「栄山江流域の古代収取聚落」『現場考古』1 号　大韓文化遺産研究センター pp61-72　2009 年　査読有
(31)千羨幸「無文土器時代韓日間地域関係変遷」『古文化』73　韓国大学博物館協会 pp33-56　2009 年　査読有
(32)亀田修一「牛頸窯跡群と渡来人」『九州

と東アジアの考古学』九州大学考古学研究室 50 周年記念論文集刊行会　pp379-406 2008 年　査読無
(33)橋本博文「古墳時代の豪族居館と生産組織」『國學院雑誌』第 109 巻第 11 号　國學院大學　pp1-18　2008 年　査読有
(34)浜田晋介「弥生時代の重複住居からみる集落の動態」『考古学研究』第 55 集第 1 号　考古学研究会　pp27-46　2008 年　査読有
(35)権五栄「漢城百済研究の最新成果」『漢城百済の歴史と文化』枚方市教育委員会・(財)枚方市文化財研究調査会　pp44-64 2008 年　査読無
(36)金武重「集落からみた湖西地域邑落社会の変遷」『湖西地域邑落社会の変遷』第 17 回湖西考古学会学術大会　pp1-16　2008 年　査読無
(37)朴升圭「考古学からみた鴨督政治体の成立と変遷」『韓国古代史の慶山』慶山市・大邱史学会　pp93-122　2008 年　査読無
(38)兪炳琭「蔚山検丹里マウル遺跡の再検討」『韓国青銅器学報』2 号　韓国青銅器学会　pp56-81　2008 年　査読有
(39)李弘鍾「湖西地域の考古環境」『湖西考古学報』19　湖西考古学会　pp4-29　2008 年　査読有
(40)坂靖「奈良盆地の古墳時代集落と居館―前期～中期における政治的動向―」『考古学研究』第 55 巻第 2 号　考古学研究会 pp29-44　2008　査読有

〔学会発表〕(計　65 件)
①山本孝文「百済王権の泗沘経営と益山」益山歴史遺跡地区世界遺産登録推進国際学術会議　2011.11.10　韓国円光大学校（韓国）
②浜田晋介「かながわの弥生ムラと中里遺跡」　シンポジウム弥生ムラの出現とその背景　2011.2.16　小田原市民会館
③坂靖「古墳時代の物流拠点　南郷遺跡群」『韓神大学校博物館 20 年の足跡』韓神大学校開校 70 周年記念国際学術会議 2010.11.12　韓国韓神大学校 18517 国際講義室（韓国）
④金武重「楽浪から三韓へ-原三国時代移住に対する事例検討-」『移住の考古学』第 34 回韓国考古学全国大会　2010.11.05　韓国韓南大学校（韓国）
⑤武末純一「九州地域古墳時代集落調査および研究現況」『日本九州地域古墳時代集落調査および研究現況』(財)大韓文化遺産研究センター・(財)全南文化財研究院共同主催 第 3 回招請歓迎会　2010.6.25　韓国(財)大韓文化遺産研究センター（韓国）
⑥武末純一「日本の弥生拠点集落とネットワーク」『青銅器時代の蔚山太和江文化』2010 蔚山文化財研究院 10 周年記念国際学術学会　2010.3.27　韓国蔚山大学校視聴覚教育館多媒体講堂（韓国）

〔図書〕(計 15　件)
①武末純一編 2012.『日韓集落の研究―弥生・古墳時代および無文土器～三国時代―（最終報告書）』日韓集落研究会出版　総 650 頁
②武末純一(共著)2011.『列島の考古学　弥生時代』河出書房　pp4-32,85-103,119
③武末純一編 2011.『日韓集落の研究―弥生・古墳時代および無文土器～三国時代―（中間報告 3）』日韓集落研究会出版　総 36 頁
④松木武彦 2011.『古墳とはなにか－認知考古学からみる古代』角川書店　総 254 頁
⑤浜田晋介 2011.『弥生農耕集落の研究』雄山閣　総 270 頁
⑥安在晧編 2011.『第 7 回韓日聚落研究会共同研究会「韓日聚落研究の展開」』韓日聚落研究会出版　総 258 頁
⑦武末純一編 2010.『第 6 回日韓集落研究会共同研究会「日韓集落の新たな視角を求めてⅡ」』日韓集落研究会出版　総 158 頁
⑧武末純一編 2010.『日韓集落の研究―弥生・古墳時代および無文土器～三国時代―（中間報告 2）』日韓集落研究会出版　総 107 頁
⑨武末純一編 2009.『日韓集落の研究―弥生・古墳時代および無文土器～三国時代―（中間報告 1）』日韓集落研究会出版　総 163 頁
⑩松木武彦 2009.『進化考古学の大冒険』新潮社　総 255 頁
⑪坂靖 2009.『古墳時代の遺跡学―ヤマト王権の支配構造と埴輪文化』雄山閣　総 368 頁
⑫安在晧編 2009.『第 5 回韓日聚落研究会共同研究会「韓日聚落研究の新たな視角を求めて」』韓日聚落研究会出版　総 238 頁
⑬李亨源 2009.『青銅器時代の集落構造と社会組織』書景文化社　総 292 頁
⑭武末純一編 2008.『第 4 回日韓集落研究会共同研究会「日韓集落の研究―生産遺跡と集落遺跡―」』日韓集落研究会出版　総 221 頁

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
武末　純一（TAKESUE JUNICHI）
福岡大学・人文学部・教授
研究者番号：80248533
(2)研究分担者
桃崎　祐輔（MOMOSAKI YUUSUKE）
福岡大学・人文学部・教授

研究者番号：60323218
松木　武彦（MATSUGI TAKEHIKO）
岡山大学・人文社会系研究科・教授
研究者番号：50238995
橋本　博文(HASHIMOTO HIROFUMI)
新潟大学・人文社会教育科学系・教授
研究者番号：20198691
坂　靖(BAN YASUSHI)
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館・学芸課・総括学芸員
研究者番号：30250377
亀田　修一(KAMEDA SHUICHI)
岡山理科大学・総合情報学部・教授
研究者番号：10140485
高久　健二(TAKAKU KENJI)
専修大学・文学部・教授
研究者番号：00281197
重藤　輝行(SHIGEHUJI TERUYUKI)
佐賀大学・文化教育学部・講師
研究者番号：50509792
山本　孝文(YAMAMOTO TAKAFUMI)
日本大学・文理学部・准教授
研究者番号：40508735
(3)連携研究者
田中　清美(TANAKA KIYOMI)
財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所・総括研究員
研究者番号：10344368
(4)研究協力者
七田　忠昭（SHICHIDA TADAAKI）
佐賀県立博物館美術館・館長
禰宜田　佳男(NEGITA YOSHIO)
文化庁記念物課・埋蔵文化財部門・主任文化財調査官
角田　徳幸(KAKUTA NORIYUKI)
島根県教育庁文化財課・古代文化センター・専門研究員
梅木　謙一(UMEKI KENICHI)
松山市考古館・主任学芸員
庄田　慎矢(SHODA SHINYA)
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・研究員
研究者番号：50566940
浜田　晋介(HAMADA SHINSUKE)
日本大学・文理学部・教授
寺井　誠(TERAI MAKOTO)
財団法人大阪市文化財協会・大阪歴史博物館・学芸員
研究者番号：60344371
李　健茂(YI KUNMOO)
龍仁大学校・教授
安　在晧(AHN JAEHO)
東国大学校・考古美術史学科・教授
池　賢柄(CHI HYUNBYONG)
江原考古文化研究院・院長
李　弘鍾(LEE HONGJONG)
高麗大学校・考古美術史学科・教授
朴　升圭(PARK SEUNGGYU)
嶺南文化財研究院・院長
権　五栄(KWON OHYOUNG)
韓神大学校・国史学科・教授
李　盛周(LEE SUNGJOO)
江陵原州大学校・史学科・教授
金　武重(KIM MOOJOONG)
中部考古学研究所・所長
金　昌億(KIM CHANGEOG)
世宗文化財研究院・院長
宋　満栄(SONG MANYOUNG)
京畿道博物館・学芸チーム長
李　暎澈(LEE YOUNGCHEOL)
大韓文化遺産研究センター・院長
李　東熙(YI DONGHEE)
順天大学校博物館・学芸研究室長
河　眞鎬(HA JINHO)
嶺南文化財研究院・慶州調査事務所・所長
金　権中(KIM KWONJOONG)
中部考古学研究所・調査研究室長
金　奎正(KIM GYUJUNG)
全北文化財研究院・研究室長
李　宗哲(LEE JONGCHEOL)
全北大学校博物館・学芸研究士
朴　栄九(PARK YOUNGKOO)
江陵原州大学校博物館・学芸研究士
李　亨源(LEE HYUNGWON)
韓神大学校博物館・学芸研究士
鄭　一(JUNG IL)
全南文化財研究院・責任調査員
朴　泰洪(PARK TAEHONG)
大韓文化遺産研究センター・調査室長
兪　炳琭(YU BYOUNGROK)
ウリ文化財研究院・調査研究２課・課長
孔　敏奎(GONG MINGYU)
韓国考古環境研究所・発掘調査室長
河　承哲(HA SEUNGCHEOL)
慶南発展研究院・歴史文化センター・資料研究室長
尹　昊弼(YUN HOPIL)
慶南発展研究院・歴史文化センター・調査研究室長
李　基星(YI KISUNG)
韓神大学校博物館・特別研究員
裵　徳煥(BAE DUCKHWAN)
東亜細亜文化財研究院・考古歴史調査団・調査団長
李　昌熙(LEE CHANGHEE)
国立歴史民俗博物館・外来研究員
千　羨幸(CHEON SEONHAENG)
全北大学校・BK21 事業団・研究教授